

# ナイチンゲール 切り拓くスピリットで

看護の豊かな未来について語り合う



松村 啓史

テルモ株式会社取締役専務執行役員

看護の世界は  
変化し続けている

松村 たかがいさんは、全国各地の現場をいろいろ見て回っていらつしやるとか。とてもいいことだと思えます。やはり、現場の感覚が何かを変えるとき一番大切ですから。

看護の応援団長を自任し、  
ナイチンゲールの著作にもお詳しい  
松村啓史さん。  
ナイチンゲールをキーワードに、  
松村さんとたかがいさんが、  
これからの看護への希望について  
語り合いました。

**たかがい** 看護の職場を歩いていると、時代が変わっていることを本当に感じます。だから、いろいろな職場を見せていただけるとは、本当に幸せです。

私の看護師としてのキャリアは急性期の臨床からスタートしました。社会保険埼玉中央病院だったので、看護職員の平均年齢は20代後半で、若い人ばかり！ 短期間で職員が入れ替わっていくという状態でした。

ところが、先日、そこを訪れたところ、看護職員の平均年齢はだいぶ上がっていました。

**松村** 上がっていますよね、絶対。

**たかがい** 簡単には辞められなくなっているんですね。私が勤務していたのは25年前のこと。バブル経済の全盛期で、お気楽に働いている人もけっこういました。でも、その時代からずっと頑張っていた人は、業務への期待は高まる一方だし、後輩はなかなか育ってくれないし、ようやく一人前になんてくれたというところに辞めてしまう。

求められる技術はどんどん上がるから、常に勉強しなければいけないし、後輩の指導もしないといけない。学生の実習指導は1年中切れ目がありません。

看護職って入職後3〜5年経つと、院内では管理者としての養成を始めます。すると後輩の指導と自分が管理職になるための研修と、現場の仕事という3つをこなさないといけないんですよ。そうして頑張ってきた人が多くいて、職員の年齢も高くなっていることを実感しました。

## これからの病院のあり方とは

**松村** 看護の職場も変化してきているんですね。私は、これから高齢化社会がどんどん進むにつれて、病院のあり方も考えなければいけないと思うんですよ。その一つが、地域の特性に合った病院の存在です。

以前、都道府県別に死亡原因を調べたのですが、それぞれ全然違うんですよ。例えば、秋田県では脳血管障害で倒れる方が

多いので、脳血管の病院が充実しています。各都道府県の特徴に応じてセンター・オブ・エクセレンス(特定分野に集中して高度な研究・開発活動を行う研究拠点があれば、医療が都市部に集中しないのではないかと思うのです。

**たかがい** 本当にそうですね。そこに住んでいる人がどういう人で、何を好んで食べ、どういう環境のなかで生きてきて、どういう医療を必要としているのかをまったく考えないで、医療職のやりたい医療を提

# たかがい 恵美子

元日本看護協会常任理事



供するような病院をつくってきたのが、これまでの日本の医療だったのかもしれないと思います。やっぱり、ここで変えなきゃいけない。

**松村** 例えば長野県にある佐久総合病院では、昔、高血圧症の患者さんが多かったそうです。味噌汁の塩分濃度が高い地域があった、それが原因の一つだったそうです。そこを一つ変えるだけでも、リスクは減りますよね。

**たかがい** 今は地域医療連携が進み、佐久総合病院も変わりましたよね。「生活を支える・命を支える」のが医療であるという考えが根本にないと、方向性が違ってきます。やはり「生活者をみる」ということを大切にしないと!

**松村** ええ。逆に、都市部には大病院はた



松村 啓史(まつむら ひろし)

関西学院大学卒業後、テルモ株式会社に入社。八王子支店長、経営企画部長などを歴任し、2005年から取締役・常務執行役員に就任。2009年から現職。

マーケティング論、経営論に造詣が深く、またナイチンゲールの熱心な読者でもある。日本看護協会のトップマネジメント研修の講師も務める。著書に『看護部が変われば病院が変わる』(日本看護協会出版会)、『ナイチンゲールに学ぶとぎめきの経営学』(メディカ出版)、『ナイチンゲール病院経営学 激務は人生を幸せにする ハーレー街病院のレポートより』(メディカ出版)など。

くさんあるけれど、プライマリをみてくれる病院はなかなかありません。一方、地方では、プライマリはみてくれるけれど、大きな病院がない。一見どちらも不完全な体制に見えるけど、マインドという部分においては、一概に言えませんが、地方のほうがいい場合があります。「自分たちの地域の暮らしと健康は自分たちで守る」という使命感があるんですよ。

### 看護師の 子育て援助のあり方とは

**たかがい** 地域の個性に合わせて考えるというのと、例えば、看護師の保育対策についても同じことが言えます。都市部では、職場に通うのに通勤ラッシュがありますよ

ね。そんな通勤ラッシュのところに乳幼児を抱えて出かけることなどできません。だから、子どもは自分の家の近くにあげたいんです。一般にフレックスタイムが当たり前の地域では、育児時間をもらっても、その間の電車は同じように混んでいます。

**松村** そうですよ。

**たかがい** とこが少し都市部を離れると、ほとんどの職員は車で通勤します。車のなかは、いわば家の延長で、自分と子どもが一緒にいられる空間なので、安心できるわけです。だから、病院のなかに保育施設があつたほうがいい。

今、保育対策として、看護職のために病院のなかに託児所や保育所をつくりましょう、という運動が盛んになっています。でも、都市部と地方の生活の違いや、病院の



### たかがい 恵美子（— えみこ）

1963年宮城県生まれ。前日本看護協会常任理事。1984年埼玉県立衛生短期大学卒業、1985年埼玉県立衛生短期大学専攻科修了、1989年国立公衆衛生院専攻課程修業、1993年東京医科歯科大学医学部保健衛生学科卒業、1995年東京医科歯科大学大学院医学系研究科博士課程前期修了、1996年WHOエイズコントロールケア研修修了、1997年東京医科歯科大学大学院医学系研究科博士課程後期中退。社会保険埼玉中央病院、宮城県大崎保健所岩出山支所、宮城県総合福祉センター精神保健部勤務を経て、1997年4月から東京医科歯科大学医学部で文部教官（地域看護学）。2000年8月厚生労働省（旧厚生省）へ出向し、厚生労働技官となる。健康局をはじめ様々な部署を歴任し、2005年保険局医療課課長補佐。2008年3月に厚生労働省を退職。2008年6月日本看護協会常任理事に就任し、訪問看護・介護保険・医療保険などを担当。2009年退任し、現在精力的に全国を巡っている。

規模についてきちんと考えるべきだと思います。

日本では圧倒的に中・小規模病院が多いのですが、この中・小規模病院で働いている看護職の6割方が20〜40代だとしても、そのうちの何人が1年間にお産をするのでしょうか？ それだけの数の職員のために病院が保育所を経営するのが本当によいことでしょうか？ もう少し地域に目を向けて、地域の人たちも使えるしくみを考えていくべきでは、と思うんです。

**松村** まったくそのとおりですね。素晴らしい意見だと思いますよ。

### 病院って、もう古い？

**松村** 「病院」という言葉は、もう変えたほ

うがいいんじゃないかな、と思います。

**たかがい** もう古いと？

**松村** 「病の院」と思うから発想がおかしくなるわけで、元気になれる、豊かに暮らせる起点じゃないですか、病院は。今、平均在院日数がどんどん短くなっています。あれは元気になって退院しているわけではなく、どこかに転院しているだけです。

**たかがい** そうですね。

**松村** 「退院するときには仏滅はいやだ」という人がいたように、日本の病院とはこれまで元気になって帰るものだったんですよ。アメリカの病院にはない発想です。アメリカではものすごく早く病院を出て、病院の前のホテルに移動することが退院です。元気になって家に帰る、本来の病院のコンセプトをもっと大事にしていくべきだと思います。

んです。

**たかがい** そうなんです。「元気になって退院する」ということを求めて、国民皆保険制度はつくられました。それが、いつしか「医療Ⅱ治療」という短絡的な制度ばかりへの偏重をすすめてしまったように感じます。そこが、今、大きな齟齬をきたしている。

これからは「医療Ⅱ看護」という発想で医療提供体制を整えていかないと、立ちいかなくなると思います。今の医療機関（病院や診療所）は治療をする場所です。今の日本には、看護ケアを必要とする方が利用できる医療機関がないのです。

**松村** 今までの病院とは違った発想の施設が必要、ということですね。「患者」も「患つた者」で、いかにも下の人という感じがします。いくら偉い人でも、主治医と患者に



なった時点で、いまだに上下関係ができてしまう。

**たかがい** ありますね。

**松村** やっぱり、患者が自分で意思決定できるようにしないといけませんよね。

患者本位の医療といえば、健康診断も、もっと身近になるべきだと思っただけで、健康診断と聞いただけで、バリウムは嫌だし胃カメラも嫌だなんて思う人もいっぱいいます。また便潜血で少しでも異常があると即、大腸ファイバーってのもきついですね。眼底検査でまぶしい光を見るのも、つらいですよ。健康診断は、もっと楽にして身近にすべきことがあると思いますね。

**たかがい** 本当ですね。看護職の中にも、人にはいつも勧めているのに、自分自身ががん検診を受けたことがないという方がいます。私は30代の半ばから、必ず受診すると宣言し、年1回の健診を続けています。看護職みんなに受けてもらいたいし、体験しないとわからないこと、見えてこないことがありますからね。

## 医療Ⅱ看護の実践とは

**松村** さきほどおっしゃった「医療Ⅱ看護」の視点は、高齢化が進んで、老老介護や独居老人の問題が深刻化するなかで、とても重要だと思えます。

**たかがい** 例えば、具合が悪いと思った時点で看護職が入っていくしくみが必要だと思えます。今は、独居で細々と療養を続けている人が、いざ調子悪くなったら、救急



車を呼ぶか、死ぬまでじっと待つしかありませんから。少なくとも医療従事者には、こうした現実には早く気づいてもらって準備を始めないと、すごく危ないと思います。

**松村** それから、日本人は健康に対する意識が低いように思います。その部分にも看護が入るべきでしょうね。

**たかがい** たしかに、今の日本では、自分の健康に責任をもつというのを習慣化する教育の場が必要となっています。学校では、行事として健康診断が行われますが、それはいずれ自分の健康を守るために自分でやるものなのだという意識を生まなければいけません。これは、成人になるまでに教えないと。就職したり大学に入れば健診の機会はあるかもしれませんが、浪人したり転職すると、とたんに健康情報が途絶えてしまうんですね。

**松村** そうですね。学校教育に看護がほとんど入っていく必要がありますね。

**たかがい** 応急処置にしても、転んですりむいたらまずは消毒して……という流れを、昔の人はふつうに体験して覚えていました。今は、それを学ぶ機会がないから、やっぱり看護師が教えていく必要があるでしょうね。

## 現場主義のナイチンゲール

**松村** このあいだ、ナイチンゲールが病院をつくったときの書簡を読んだのですが、まさに現場に密着したアイデアを自分たちがやっていて、すごいなと思いました。



**たかがい** ナイチンゲールがプロとして素晴らしいと思うのは、政治家や経済界などにいろんな人脈をもち自らがビジョンをもって政治的活動を行っていたことです。看護職だけで完結しようとしても無理ですからね。いろんな人から知恵や力をもらって「一つの命を救う」ことを形にしているんですよ。私も迷っている場合じゃない、地に足つけていかないと、と強く思います。

**松村** 私も「現場学」ナイチンゲール」だと思っので、そのスピリットはすごいなと思います。

あるきっかけがあつて、ナイチンゲールはなんで幸せだったんだろう、って考えたんですよ。なんでたかがいさんは幸せそうな顔なんだろう、とも(笑)。

それでわかったのが、使命感があるからだ、ということなんです。ナイチンゲールはもともとお金持ちだったけど、全部捨てて看護に生きた。使命感を貫いて生きたから、幸せだったんだろう、と。たかがいさんも激務だろうけど、日本の看護を変えたい、看護師さんの幸せな顔を見たい、という深い思いがあるから幸せそうなんだろう



松村さんが2009年4月に出された『ナイチンゲール病院経営学 激務は人生を幸せにする ハーレー街病院のレポートより』。「激務」というタイトルにドキッとします。

と思いました。

**たかがい** 激務とは思いませんが、幸せです。働くことは、人を幸せにすると思っていますもので(笑)。そういえば、今回出されたご本「ナイチンゲール病院経営学 激務は人生を幸せにする ハーレー街病院のレポートより」(メデイカ出版)というタイトルは、なかなか印象的ですよね。

**松村** このタイトルは物議をかもしたんですよ。「激務」は、「燃え尽き症候群」のことではないかと。ただ、激務って英語でいうと「ハードワーク」なんです。で、ハードワークは日本語では「勤勉」になります。つまり、ハードワークという解釈でいいんじゃないかと。

**たかがい** なるほど、そういうことでしたか。

## ナイチンゲール・スピリットで新しい時代の看護を

**たかがい** 実は、ときどき「老後は何やってるだろう」「自分は何も残していないんじゃないか」と思うこともあります。でも、



たかがいさんが2009年に出された『ナイチンゲール・スピリットで行こう～成熟社会を創る看護力～』(太陽出版)。たかがいさんのこれまでの看護との関わりと、これからの日本社会で看護が重要な役割を担うことを熱く語っています。

今自分がこうしていられるのは、周りの人が支えていてくれるからなんですよね。

**松村** そのとおりですね。感謝の気持ちと志がないと、天命を全うできません。生かされているという謙虚な気持ちが必要ですよ。だから、たかがいさんはナイチンゲールの再来だと思いますよ。

**たかがい** いえいえ、そんな立派なものはありませんが(笑)。でも、前向きに、とにかく今日できることをきちつとやっつけていくのだ、と思っています。それができると自分が幸せなんです。

**松村** そうですよ。だから毎日が新鮮でしょ？

**たかがい** はい。私たち看護職はこれから先本当に新しい時代を迎えたいと思います。自分の使命にしっかり向き合ってさえいけば、次にやるべき方向や事柄が見えてくる。そこに、また一歩ずつ進んでいくことができますかどうにかかっていると思います。

**松村** ええ、そのとおりだと思います。ナイチンゲール・スピリットで進んでください。

**たかがい** どうもありがとうございます。